主体性を育てる生活指導の取り組み

～指導のつながり、広がりを考える～

北海道旭川盲学校　専門寄宿舎指導員　穴田　義則　他

１　はじめに

本研究は、舎生の主体的な寄宿舎生活を考える取組として、全盲児童１名の具体的な生活場面に焦点を当て、２年計画で取り組んだ研究である。

本研究を前に令和元年度の研究で、主体的な活動の前後に付随する「主体的な移動」をテーマに必要な指導内容、配慮事項、環境整備などを、同じ全盲児童の実際に指導した動線を使い検証した。取組の中で、「指導の一貫性と共通理解」、「身に付いている知識や概念と伝え方」、「他の指導場面との関連」の重要性が確認された。

そこで、令和２年度からの研究はそれらの重要性を踏まえ、舎生一人一人が自信をもって行うことのできる生活行為を増やすことが、より主体的に寄宿舎生活を送る力につながると考え

キーワード１、基礎となる力、概念の形成

キーワード２、自ら考え動き出そうとする力

キーワード３、目的をより良く達成するために工夫する力

をキーワードに、研修と実践を通して取り組んだ。

２　対象舎生の実態

（１）小学部第６学年（現在、中学部第３学年）男子、重複学級

（２）視力及び障がいの程度：未熟児網膜症　右０、左光覚

（３）その他の疾病：てんかん

（４）日常生活の実態

ア　キーボードにある多くのボタンと鍵盤の位置関係を把握し自由に操作ができるなど、興味や関心のあることは非常に早く習得する。

イ　日常生活全般に、言葉掛けなどのきっかけがないと動き出さないことが多い。

ウ　日常生活全般に依存心が強く、周囲に頼ろうとすることが多い。

エ　興味や関心の偏りが大きく、生活上必要な概念や確認動作が身に付いていないこともあり、指導が積み重なりにくい。

オ　物を触って確認することが苦手である。

カ　意図と違う関わりや反応に気持ちが不安定になり、素直に取り組めないことがある。

３　研究の概要

当該舎生が課題意識をもち始めた入浴に付随する活動であることや、入浴担当として舎室担当以外の職員も関わる場面であることなど、本研究に適した指導場面と考え、実践場面を脱衣所での活動に焦点化して取り組んだ。

（１）研究方法

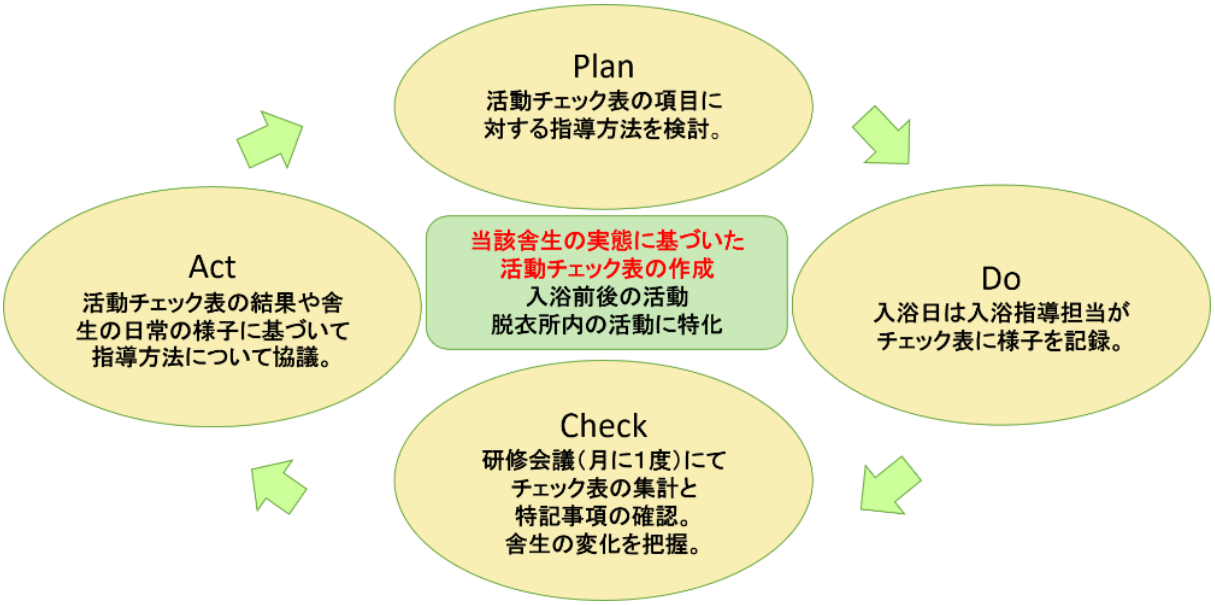
ア　舎内研修は触察をテーマに体験的な研修を行い、基礎的な力や概念についての理解を深める。（キーワード１）

イ　当該舎生の実態に基づいた、活動チェック表（別紙資料１、２）を活用し実践報告を行い、今後に向けた指導の改善点の確認と検討を繰り返し行う。また指導成果の他場面への広がりを検証するため、前後の活動も指導ごとに評価を行う。（キーワード２，３）

ウ　各舎生毎の実態を表す寄宿舎指導一覧（別紙資料３）での評価を行い、生活全般の評価と主体性について考察する。（キーワード２，３）

エ　活動チェック表は寄宿舎指導一覧に合わせ、目標となる項目を「できる」と「言葉掛け」、「視覚的」、「身体的」の３つの手がかり（以下、プロンプト）、まだ指導段階には至っていない「全介助」でチェックを行うこととした。

オ　指導を進める経過の中で必要なキーワードを抽出し、寄宿舎指導員間で共有しながら進める。（キーワード全般）



[redacted]

（２）研究経過（１年次）

5月 21 日	日程、内容の決定
6月 25 日	実践報告、指導一覧を基にした実態把握、指導内容の共有 舎内研修～当該舎生の脱衣室内での指導場面を想定して『脱衣所動線』（別紙資料４）通りに行動し、動線の確認と検証を行う。
7月　9日	舎内研修～アイマスクを着用し洗濯物をかごから取りだし畳む。
8月 27 日	実践報告
9月 24 日	実践報告、北海道視覚障害教育研究大会研究紀要　重複障害教育分科会　札幌視覚支援学校「実態評価表にみる就労に向けた本校生徒の課題」などを参考に、就労と主体性について舎内で意見交換 舎内研修～自立活動教材体験（同じ大きさの穴に棒を入れる。指定の穴に棒を入れる。）

10月22日	実践報告、広く達成感について舎内で意見交換
11月26日	実践報告、プロンプトと見守りとのバランスについての考察 舎内研修～アイマスクを着用し紙にできるだけ大きな円を描く。
12月24日	指導一覧を基にした評価、活動チェック表の集計と分析結果報告
１月28日	１年次まとめ

（３） 研究経過（２年次）

5月27日	日程、内容の決定、指導一覧を基にした実態把握、指導内容の共有 舎内研修～「視覚が制限される中での感覚や知覚についての考察」
6月24日	実践報告
7月15日	舎内研修～触察する力、伝達する力、イメージする力
7月26日	実践報告
9月30日	実践報告 舎内研修～①形を知ろう・②レーズライターとは
11月25日	実践報告、活動チェック表の集計、分析結果報告
12月23日	指導一覧を基にした評価 舎内研修～空間概念とイメージ
1月27日	２年次まとめ

４　結果と分析

（１）環境変化への適応と活動への自信や達成感について

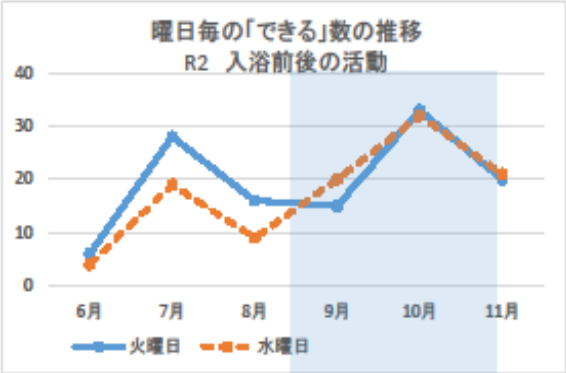
ア　令和２年度は、宿泊が火曜日の１泊から火曜日と水曜日の連泊開始と、コロナ禍でのスタートも重なり、当該舎生には大きな環境変化の年となる。環境変化への適応を、脱衣所内の活動と入浴前後の活動の曜日対比で見ると、8月 25 日の集計より、複数の活動場面で水曜日の「できる」の数が同程度以上で安定している。同時期に変化が見られたことから、連泊に対する生活の見通しをもち、心理的にも余裕ができてきた時期と考える。

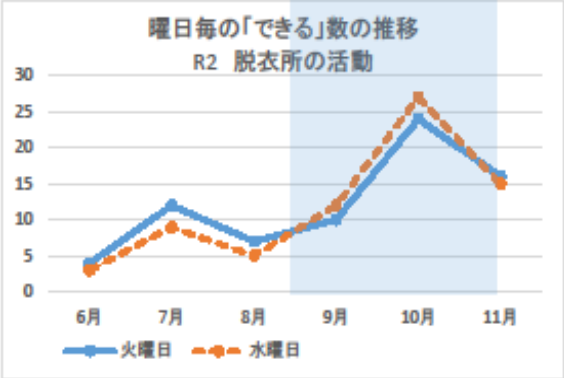
　また、環境変化へ適応し本来の力を発揮するのに、およそ３か月を要している。小学生から中学生へと変化した令和３年度も新しい環境に適応するのに同程度の期間を要している。（図２参照）

イ　環境変化への適応ができた令和２年９月末から入浴前後、脱衣所内の活動に「できる」が一気に増え、「プロンプト」数が減り評価が逆転する。その後「できる」の数は安定して推移している。（図３参照）

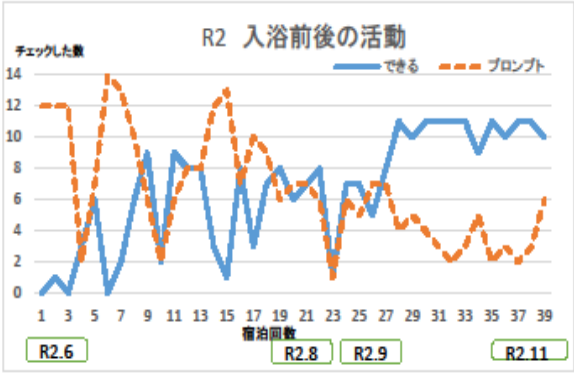
　合わせて、浴室内での体洗いや洗髪も、不十分ではあるが自分で行おうと自発的に動く様子が見られるようになってきた。

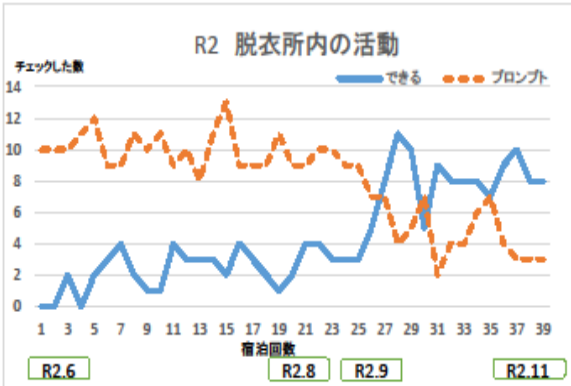
ウ　令和２年９月までは自信がない様子で一つ一つの活動に「〇〇だね～。」と、職員に同意を求める様子があったが、10月以降は減少し、同意を求める言葉ではなく「忘れました。」など自分の状況を伝えることや「〇〇ですか？」など、質問として明確な発言に変わってきている。





[redacted]





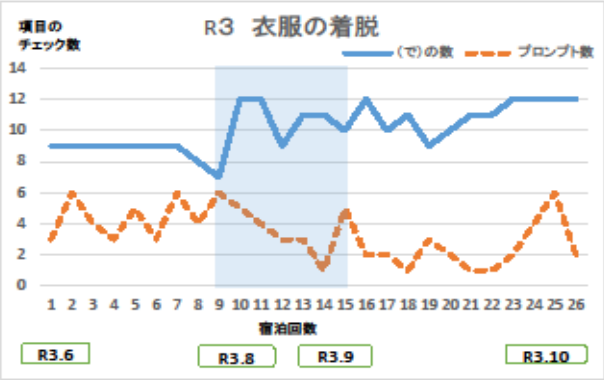
【図３】　チェック項目「できる」と「プロンプト」数の推移

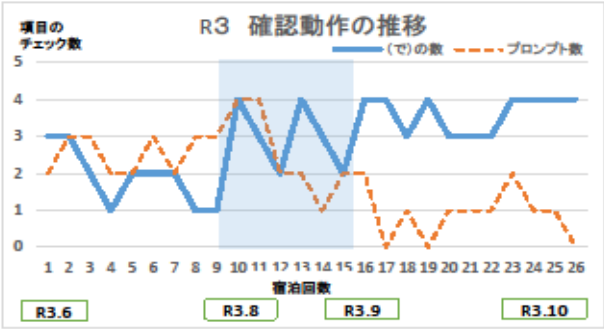
（２）必要性の理解と成功するための工夫について

ア　全盲の舎生にとって、日常生活全般において触って確認することは、活動を成功するために重要な適応スキルである。１年次の取組で「できる」にならず課題となっていた衣服の脱着に、手がかりや前後、表裏を触って確認する動作が不十分なため失敗し時間がかかってしまう様子があった。そこで２年次は、できるようになった活動がより確実なものになるよう、確認の必要性理解を重点に取り組んだ。

イ　確認動作は課題となっている着衣時の着る前、着た後、最終確認の３回の確認動作を指導し評価した。

ウ　衣服の脱着の「できる」と確認動作の「できる」が同時期に増えているが、脱





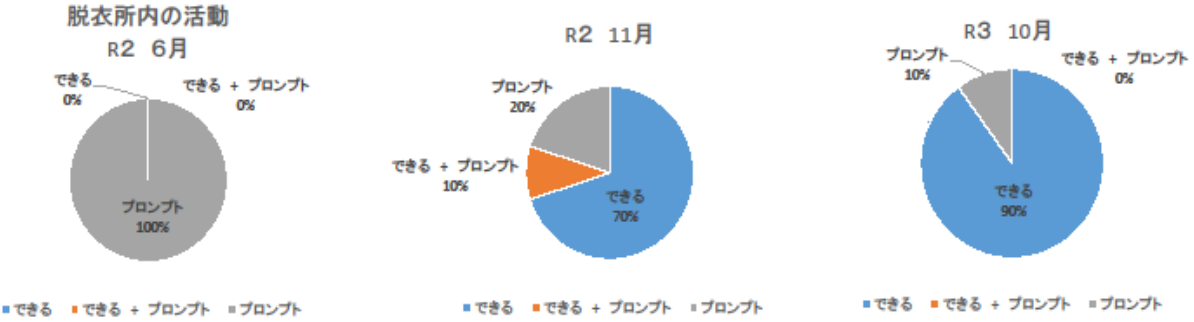
[redacted]

着の方が少し早く増えて安定している。脱着が上手に行えたときに、職員から認められる、自分でもできたという実感がある、確認した方がやり直しが少なく早いなど、当該舎生なりに確認動作の必要性を見いだしてきたと思われる。

エ　確認動作は長期休みを挟み、１ 度安定しない状態となったが、９月以降は安定して推移している。他の生活行為でも徐々に確認をする様子が見られてきた。（ウ、エ　図４参照）

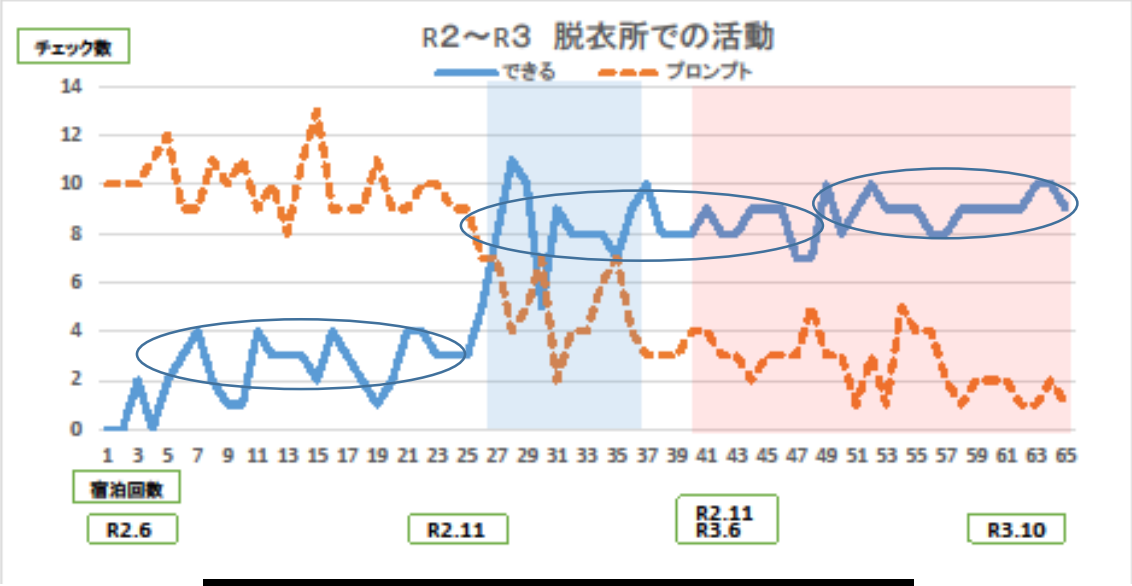
（３）脱衣所内での活動全般を通した分析

ア　評価項目における「できる」と「プロンプト」の内訳をみると、指導開始時０%だった「できる」の割合が、１年次評価時 70%、２年次評価時 90%となり、脱衣所内での一連の活動はほぼ一人で行えるようになった。（図５参照）



[redacted]

イ　２年間を評価項目における「できる」の推移でみると、指導当初から環境変化への適応までの期間と、環境に適応し本来の力を発揮し始めた期間、自分なりに工夫を始め、新たにできたことも増えてきた期間が見て取れた。また、１年次の１泊から連泊への変化や、２年次の中学生としての社会的ニーズの変化など、当該舎生にとって大きな環境変化への適応の期間とほぼ一致する形で現れている。（図６参照）

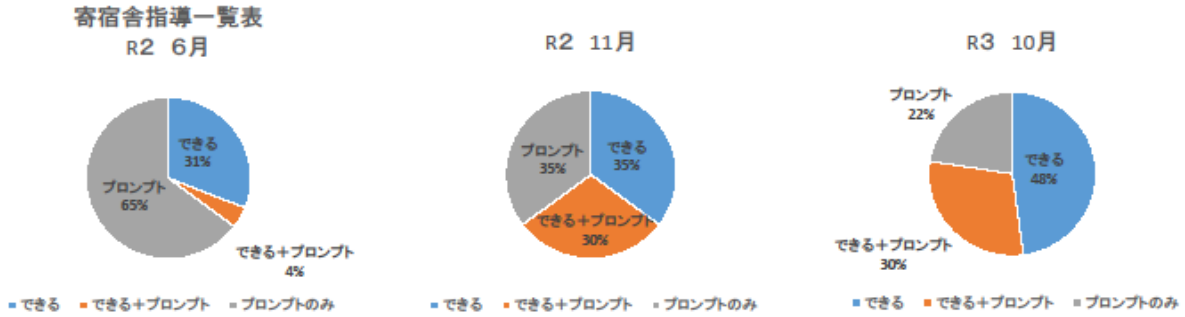


[redacted]

（４）寄宿舎生活全般における評価

ア　寄宿舎の生活全般を評価する指導一覧では、起床から就寝に至る全般において「できる」の割合が指導開始時の 31％から、１年次評価時 35％、２年次評価時 48％と増えている。

イ　起床、食事など大きな活動のくくりではまだ支援が必要な項目もあるが、「できる」と「プロンプトがあればできる」項目の割合が指導開始時の 35％から、１年次評価時 65％、２年次評価時 78％と増えている。



[redacted]

５　成果

（１）<u>キーワード１　基礎となる力、概念の形成</u>

アイマスクを着用した様々な体験的な職員研修を継続して行った。視覚を有しないことによって、「どのような基礎となる力、概念が身に付いていないのか」という側面から職員が当該舎生を捉えることの必要性が再確認できた。

しかし、基礎訓練の方法を学び舎生に応じた指導を日々行っていくことや、様々な概念が実際の生活上どの場面で身に付く力なのかを検証することはできなかった。

（２）<u>キーワード２、３　自ら考え動き出そうとする力、目的をより良く達成するために工夫する力</u>

研究開始当初、言葉掛けなどのきっかけがないと活動の切り替えができない様子であったが、自信をもって活動できる場面が増えたことで自発的に動き出す場面が増えた。また、余暇などで自己決定する場面も増え、生活全般で自分なりの工夫をしながら主体的に活動する様子が多く見られるようになった。

（３）研修会議で協議を進める中で得た成果

ア　当該舎生の実態に合わせた活動チェック表を作成・活用し、指導にあたった職員が毎回評価を行い、気になる様子なども記録した。指導内容や実践結果について活動チェック表を基に協議、検討することで全職員が情報を共有し、一貫性を保ち継続した指導にあたることができた。

イ　協議の中で、「就労先で求められる力」、「達成感」、「プロンプトと見守り」、「定着と必要性の理解」などをテーマに、「大人になったときにどう生きている？どうなって欲しい？求められるものは？」などを考える時間を設定した。現在の指導が、将来、何につながって

いくのかを考える良い機会となった。また、主体的な生活を送るために必要な要素として以下のことを職員間で確認できた。

・環境への適応→生活の見通しや活動の習慣化
・自分でできるという実感→達成感、自信
・できた、できないに関わらず、自ら進んで活動する意識→自主性
・より良く効率的にできるように工夫をする必要性の理解→主体性
・その工夫は社会的に適切である。→社会性、規範意識

ウ　２の対象舎生の実態で記した通り、指導が積み重なりにくい当該舎生であったが、今回の取組をデータ化できたことで、大きな成長とその傾向を明確に示すことができた。

（４）課題

チェック表からはできると評価したことも、日課に遅れないように支援する場面や、職員が言葉掛けをしてしまう場面が多く見られた。全体の動きや日課との関連から、その見極めの困難さが課題として残った。

現実的に自主性・主体性を発揮する環境をどれくらい作れるか、場面の設定を統一できるかなど、本人の「行動とその結果を結びつけていくこと」について、議論を深めるには至らなかった。

６　おわりに

今年度、当該舎生は中学部第３学年となった。現在も様々な課題に取り組みながら、洗濯や掃除などの生活行為と余暇を自分なりに組み立て、週間の見通しを立てて生活を送る様子もみられるまでに成長している。

本研究では、毎回の入浴指導の際に活動チェック表による評価と様子を記録し、約１か月ごとに集計と検討、改善のサイクルを繰り返すことを基本とした。指導や支援の方法の検討を重ね、現在の課題や取組が寄宿舎指導員間で共有されてきた。特に脱衣所で直接指導に当たる男性職員の間で、共通理解のもと当該舎生への指導を行うことができたことは、当該舎生が戸惑うことなく様々な生活行為の習得につながり、自信をもって行うことができる活動が増えていった。自信をもって行う活動が増えていくことで、当該舎生が自ら考えて行動する場面が多く見られるようになり、主体的な活動とつながってきている段階であると考える。

今年度、新たに全盲の児童が入学し寄宿舎を利用している。今後も様々な生活行為を身に付けていく中で「自信や達成感」を高めると同時に、それらを日常生活の中で活用していくことの「必要性や目的の理解」を様々な場面で指導しながら、舎生達のより主体的な生活につなげていきたい。

活動チェック表（自主性・主体性）　6／　2～

5段階チェック（左マスより）　●で表記する
できる　言葉掛　視覚的　身体的　全介助

舎室	室	学年	学部　年	氏名		評価者	

【NO 1】

項目	基本動作	火曜日					水曜日				
		(で)	(言)	(視)	(身)	(全)	(で)	(言)	(視)	(身)	(全)
入浴前後の活動	【入浴前】										
	シャンプー、ボディーソープ、タオル、洗面器などの準備をする		●					●		●	
	必要に応じて洗面所と舎室の移動をする。				●					●	
	着替えの準備をする				●					●	
	入浴の告知で脱衣所に向かう		●				●				
	【入浴後】										
	必要に応じて洗面所と舎務室、舎室の移動をする		●					●			
	シャンプー、ボディーソープ、洗面器などの片付けをする				●			●		●	
	洗濯をする					●					●
	ドライヤーを舎務室で借り、髪を乾かし返却する				●					●	
	好きな活動を自分で決め行う。必要に応じて活動場所へ移動する					●		●			
	※自発的に活動場所に移動する					●					●
	※できないことは援助依頼する		●					●			
	※活動を自分で決める					●					

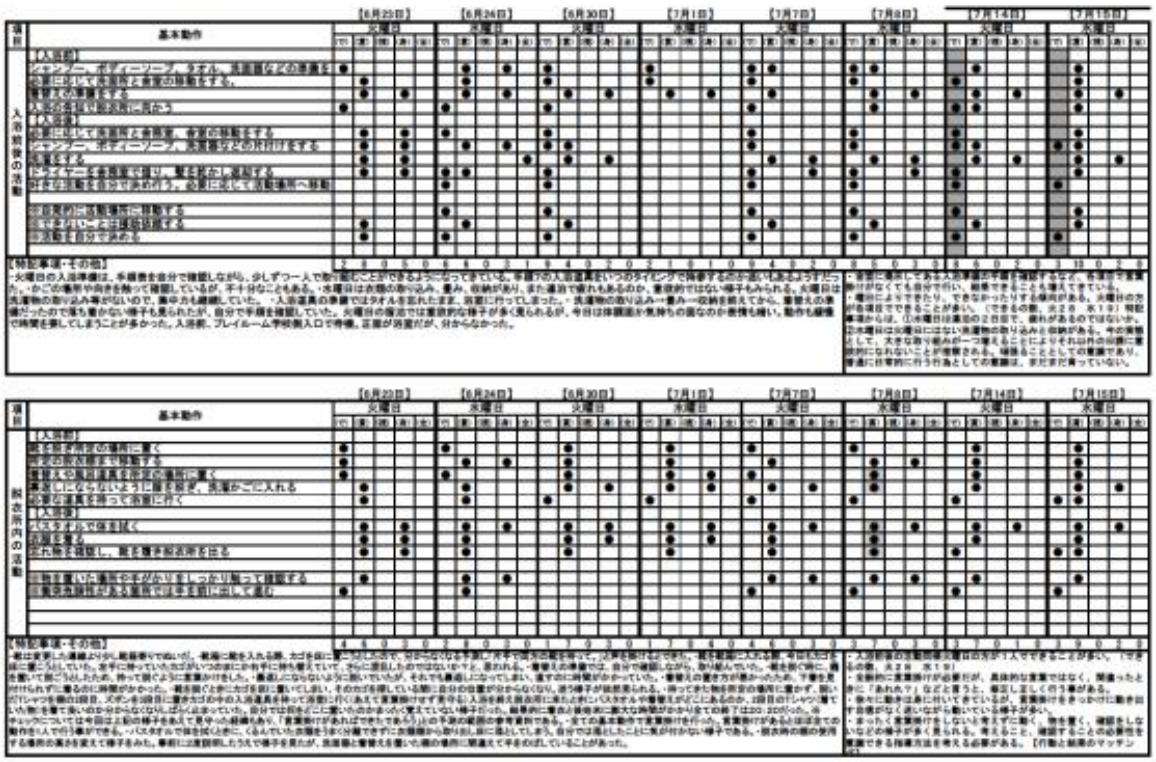
特記事項	
・4室と各活動場所の位置関係を覚えていない、昨年度まで生活していた3室の入り口に行きそこからわかるルートで移動しないと迷う場面が多かった。可能な限り確実に分かる場所からやり直しをさせた。 ・トイレ以外は声を掛けないと動けず自発的な動きはない。	・昨日の脱衣室での流れを思い出しながら行動しようとしていたが、職員に何度もたずね、時々動きが止まりながら活動していた。 ・一つ一つの動作に時間がかかることが多い。

【NO 1】

項目	基本動作	火曜日					水曜日				
		(で)	(言)	(視)	(身)	(全)	(で)	(言)	(視)	(身)	(全)
脱衣所内の活動	【入浴前】										
	靴を脱ぎ所定の場所に置く		●					●			
	所定の脱衣棚まで移動する				●			●			
	着替えや風呂道具を所定の場所に置く				●			●			
	裏返しにならないように服を脱ぎ、洗濯かごに入れる				●			●			
	必要な道具を持って浴室に行く				●			●			
	【入浴後】										
	バスタオルで体を拭く				●					●	
	衣服を着る				●					●	
	忘れ物を確認し、靴を履き脱衣所を出る				●					●	
	※物を置いた場所や手がかりをしっかり触って確認する				●					●	
	※衝突危険性がある箇所では手を前に出して進む		●					●			

特記事項	
・導線の確認を本人と行った（ほぼ、手を添えて行う） ・衣服を着るのは前後の確認など忘れている様子だった。 ・靴を脱いでから棚に置くのは、今回の導線の方がスムーズ。手に持ったカゴは靴を脱ぐときに床に置いていた。	・一つ一つの動作に時間がかかることが多い。一つ一つ確認しないと次の行動に移れない。動きが止まる。 ・一つ一つの行動に時間がかかる。 ・洗面器は左手と胸で保持し、ドアを開けられる。

[redacted]



[redacted]

令和〇年度　寄宿舎指導一覧表【記入例】

5段階チェック（左マスより）　●で表記する
できる　言葉掛　視覚的　身体的　全介助

舎室	〇室	学年	〇学部〇年	氏名	〇〇 〇〇	作成者	〇〇 〇〇

【NO 1】

項目	基本動作	前期（で）	前期（言）	前期（視）	前期（身）	前期（全）	後期（で）	後期（言）	後期（視）	後期（身）	後期（全）	様子・配慮事項等
起床・就寝	時間になったら起きる。		●				●					【前期】 ・起床の音楽で目覚めないことがあるので、言葉掛けをしている。 【後期】 ・起床の音楽前に目覚めていることが多くなり、音楽を合図に自分から離床できるようになった。
	布団をあげる。		●		●	●		●		●	●	
	布団を敷く。		●		●	●		●				
	時間になったら就床する。		●					●				

〈年度末・次年度に向けて〉
・シーツやタオルケットなど、大きなものを畳むことができるようになる必要がある。

基本的な内容のみ取り上げているが、これ以外に取り組む項目がある場合は、付け加えて記入・チェックを行う。

（で）できる
（言）言葉掛けでできる
（視）視覚的支援でできる
（身）身体的支援でできる
（全）全介助、できない、
指導の対象としていない

・支援の必要な項目についての実態、取組内容、配慮事項を、具体的に記入する。
・途中で内容を変更したり付け加えたりすることがある場合は、随時更新する。
・原則上書きはせず、年間の子どもの変容がわかるようにする。

・項目を達成するために必要なことや次年度への課題、引き継ぎ事項を記入する。
・<u>前年度の●評価は前年度主担当が次年度の指導一覧表に記入して引き継ぐ。</u>

[redacted]

脱衣所動線（7月16日～）

【脱衣所】

持参した道具や衣類を所定の場所に置く。
・バスタオルに包んである着替えの衣類は、床に落ちないようカゴの中で包みを解除し、下段の棚に置く。
・脱いだ衣類はカゴの中に入れる。

靴置き場の棚。どこに置いたか確認させる。

脱衣所から出るときに使用する動線の右側の壁。実際の動線上にはないが、脱衣所を既知の状態にするために浴室や玄関、脱衣棚との位置関係は指導する必要がある。掃除ロッカードアの開閉等、状況確認させる。

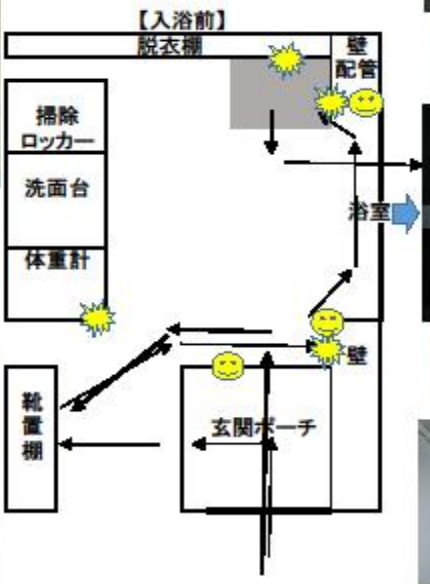
→ 歩行経路　→ 修正した歩行経路

手がかりとなるポイント

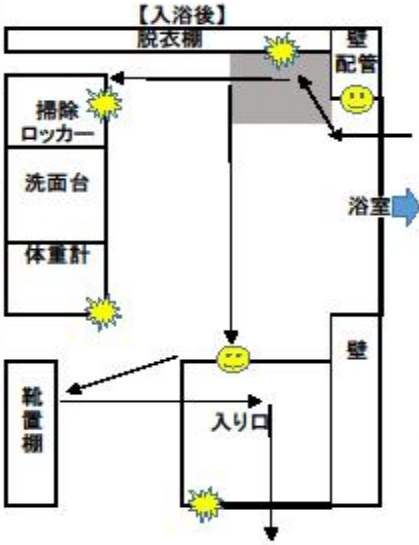
衝突が危険なポイント

着替える場所

【入浴前】



【入浴後】



脱衣棚をを見つけるとき、浴室に向かうときに手がかりとなる手すり。確認させる。

壁に沿って方位を変えるときに手がかりとなる壁。角があり危険箇所でもある。確認させる。

・靴を棚に置いてから反転し、玄関の縁に沿って浴室方向に進む。
・通出時、脱衣棚で定位を取り。まっすぐ進むと足で確認できる。
→確認させる。

右から2列以内の棚で定位を取り直進すると入り口に着く。段差を足で確認しながら靴置き場へ行く。

[redacted]